

「家庭（ホーム）で糸を紡ぐ（スパン）」が語源のホームスパン。織りはもちろん、糸まで手作りなのが一番の特徴だ。糸は必ずしも均一とはいかず、デコボコ感がでるのがかえて作品の表情となり、愛される理由にもなっている。

岩手にホームスパンが伝わったのは明治初期。二戸地方に緬羊が導入されたとき、同地に住んでいたイギリスの宣教師によって織り方が教えられたといわれている。

商品ができあがるまでの工程は、大きさによって変化はあるが、デザインを固める期間を含め大体3カ月かかる。まずは毛の選別。原毛を広げてゴミを丁寧に除去、用途に応じて仕分けていく。次に、仕分けた原毛を石けんで良く洗い、染色する。思ったとおりの色はすぐには出にくいので、何度も染めるのだという。染色が済んだら解毛し、カード機で毛の繊維を揃える。繊維をらせん状に丸めたら、糸車を回転させて紡いでいく。手の感覚だけで、糸を太くしたり細くしたりしなければならず、かなりの技術が要求される作業だ。それをムラや紡ぎ手のクセがないように調整しながら織り上げる。織り上げたマフラー布は、石けん入りのお湯の中で縮絨して糸を固定する。仕上げに幅を揃え、適正な温度でアイロンをかけたらようやく出来上がりだ。



もり
おか
ブランド
物語



ホームスパンの主な商品は、マフラーやストール、ブレザーなど。その他、帽子や一本織りのネクタイ、札入れなどもある。5、6年前から「アルネ」や「ロハス」、「クロワッサン」などの全国誌に取り上げられるようになり、若いカップルや家族連れの購入者も増えたという。

現在、盛岡でホームスパンを製作している工房は、みちのくあかね会、岩手ホームスパン工房、中村工房、蟻川工房の4つ。工房に所属せず、個人で製作している人もいる。

かつては岩手県以外でもホームスパンは作られていたが、今ではほとんどない状態だ。なぜ岩手にだけ根付いたのだろうか。その理由として、みちのくあかね会の谷藤氏は、「寒さが厳しい地域であること」「技術を伝えるよき指導者がいたこと」「地道な作業をコツコツ続ける人柄であること」「作品のよさを理解し、購入してくださるお客様がいること」をあげる。

ホームスパンの作品は、軽いのに驚くほど暖かく、着け心地が抜群に良い。ほぼ一点物であることも嬉しい。寒さが増すこの季節、ぜひ利用してほしい。

盛岡特産品ブランド認証委員会

〒020-0055 岩手県盛岡市繫字尾入野 64-102
代表電話 019-689-2201 ファックス 019-689-2212